

六 花 7



俳句雑誌りつか
2017 (平成29年)
cover design Yuna Mizuno

山田六甲

余花に入る

かん
閑

五月雨の東京ですよおつかさん

残花かな厨の背山明くして

筍を掘る 四人<sup>よっ
たり</sup>ともう一人

走り根を鞭といひしよ筍掘る

盛上がる土はたかな地雷なり

露摘みをさそはれゐたり急傾斜

農小屋の看々踊り踊子草

蛙鳴く棚田にまくら向け眠る

東雲を待ちきれず百千鳥かな

筍を五右衛門釜に茹でにけり

桜山 鳴亀庵18句

悼 故泉勝利君も来て

未 来 て ふ 大 吟 醸 ぞ 春 の 炉 は
夕 里 に 夕 日 差 し こ ず 花 蘇 芳
良うしろ の 大 樹 は 余 花 に 入 り に け り
農 小 屋 の 茶 室 に よ か り 炉 を 塞 ぐ
山 水 の 外 厨 な る へ び 苺
山 水 に 筍 晒 し ゐ た り け り
筍 も 独 活 も 味 噌 焼 日 本 酒 派
光 よ り 先 を い き た る 蛸 か な
ほ う た る の 後 追 ひ を し て 光 か な

雪嶺抄

朝ざくら

笹村 政子

朝ざくら窓にグラウンドピアノかな
うぐひすの樹々の間を鳴きにけり
水を噛み風をつかんで猫柳
やはらかき風に傷みし花辛夷
春の雪はねたる鯉の反り身かな
日当りて苔のつめたき椿かな
思ひきり吹いてみたかり石鹼玉
菜の花や嬰の匂ひのすれちがふ
喪帰りのおぼろの帯を解きけり
桜咲く少しのびたる夫の試歩

雪卿集

馬酔木

佐津のぼる

おぼる夜や宿の下駄借りそこらまで
笹舟を浮かべ暗渠へ春の水
停泊の船の水吐く春の昼
遅き日や石工は飽まず石を打ち
馬酔木咲く縁起さだかでなき古刹

芽柳

志方章子

あめんぼに引きつつてゐる池の面
放りおきし春蘭花をつけにけり
靴下を脱ぎ確かめむ春の土
芽柳や行き交ふ人に情あり
もどかしく電車待ちをり月朧

雪卿集

猫
柳

藤生不二男

曲りくる早瀬の光猫柳
薄氷水車の音の軋みをり
鍬の柄に寄りかかりたる鳥曇り
雛の間の正座の似合ふ男かな
陽炎をまだ抜けきらぬ走者かな

糸
桜

出口

誠

枝先にただ一つ咲く糸桜
めしべ見せ開きをりたるチューリップ
ランドセル母に持たせて新入生
おめかしの子がふらここをこぎてをり
息子より小さき父よ春の宵

雪卿集

花

永田万年青

朧夜のすれ違ふとき会釈され
春満月黙して顎を上げてをり
側溝の雨水通はす花の庭
花万朶耐えて大地に還りけり
宴会の曖昧に果つ春の月

紅枝垂桜

升田ヤス子

おぼろ夜の仏壇に読む母の手記
野良の足洗ふ外井戸月おぼろ
さきがけて喪の家に咲く桜かな
心あらば地に文書けよ紅枝垂れ
落雲雀風に煽られゐたりけり

春の波母の寢息に聞こえけり

篠原 敬信

はるのなみははのねいきにきこえけり しのはらけいしんし

水底に緑列なす菖蒲の芽
せせらぎの音高なりぬ春の水
草の芽の色増す岸边そよぐ風
春眠や夢の奥からベルの音
春の波母の寢息に聞こえけり

春の穏やかな波に母の寢息を聞いた。「父は山、母は海」と、古来より海は母に喩えが多い。その諺やいわれをこの句に結びつけたのは作意（作為）でなく、波音を聞いているうちに、理由なく母の胎内で浮遊しながら聞いた寢息の記憶が蘇ったのか。添い寝をしてくれた時の母の寢息であろうか。

波音に包まれながら、意図せず授かった句のはず。戦後、西東三鬼が加古川の別府にいた頃、山口誓子に魚釣を勧めたら「釣をしているとき名句が通り過ぎたらどうします」と言われたというが、釣でも授かる瞬間が来る。四時俳心を研ぐ人には……。

六甲

雪樹集

春の風邪

谷口一猷

おぼろ夜の錫のちろりの白さかな
大橋のぐにやりとたりて島おぼろ
満開の祝バースデイ春の色
不順とは七日遅れの花見かな
百葉の長を一服春の風邪

竹の子

溝渕弘志

池覆ふ強風舞ひて桜散る
校庭に響く笑顔や一年生
宅急便竹の子と糠レシピ付き
店先で春たつぷりの紅茶する
青空に白木蓮が浮びをり

雪樹集

花

住田千代子

老木の幹に吹きたる桜かな
満開の白さに暗き花の下
落ち着ける所へ花の散りぬるを
花追うて静かな刻を過ぎしけり
ゆつくりと溶かす漢方花疲れ

姫射干

田尻勝子

姫射干の紫静か野草展
春寒や金目銀目の猫抱いて
池守のバルブを開けし春の水
紅差指頬に滑らす春化粧
おぼろかな無限大に乳洗ひゐて

雪樹集

梅雨入り

延川五十昭

梅雨入りや走り根うねる遊女塚
信濃かな青梅の実のやはらかき
武蔵野の梅雨の晴れ問となりにけり
青梅を硝子器に盛りてあり
梅雨入りや赤城は遠くかすみゐて

初音

廣畑育子

翡翠の居りし汀の雁木かな
脱ぎし皮足元にあり竹青む
鼻は子に即かず離れずをりにけり
潮入の橋のかかりに花檣
石磴を上りゐしとき初音降る

雪樹集

あめんぼう

赤松有馬守破天龍正義

いちびりの子のはしやぎぬる花筵
春落ち葉集め贅沢気分かな
春の月朧一枚羽織りけり
あめんぼうぱたんぱたん跳ねてをり
慎ましき花の下なる雨の庭



蛩雪譚

六甲選

二十九年六月号鑑賞と随想

梅雨寒や走り根うねる遊女塚

延川五十昭

梅雨に入ると急に寒く冷えることがある。それが梅雨寒。この句の遊女塚があるのは全国のどこであつてもよい。塚のそばに大木の根が地上にうねり出て這っている様子で、その様は遊女たちの悲運の叫びの手が格子から出ているようにも思える。それを言わず走り根だけを詠んだのがいい。

翡翠の去りし汀の雁木かな

廣畑 育子

雁木とは川へ降りる階段のような構造物。そう呼ばれる理由は広辞苑を参照して欲しい。翡翠とはカワセミのこと、嘴が長く羽の色が翡翠のようであるから名付けられたのだから。しょうびんともいいその言葉をひっくり返した敏捷が呼び名として適うほど行動が素早い。あつというまに水中に刺さって小魚を加え雁木などで飲み込んで、あつという間に視界から消える。あとに残った雁木の濡れ跡がきぬぎぬ。

六花集



平居 濤子

太極拳指先の反り風光る
円墳を囲むたんぽぽ白光す
鉄線花己の夢の羽交じめ
ガーベラの花頸折れる忌日過ぎ
薫風にアレンジされてサンサースン

菊谷 潔

咲きにけり我に向ひて花しずか
春はきぬとわらべも知るや桜餅
これはまあ盛りの花は雨を呼ぶ
行く春や背に散りかかる花ごるも
千金の春の夕暮花は散る

善野 娘

麦青む道々加古の堤まで
百方の芽木より来たる風にがし
春光に呵々たり草も木も花も
朧夜かなひしとかい抱く女紋
気に懸かる留守電のあり万愚節